

子どものためではなく、大人のための繪本

①子どもが大人へと成長していく過程を描いた物語はたくさん存在している。それらは細かい点こそ違えど、基本的には子どもたちが理不尽な大人の社会との折り合いを付けていくものがたりである。子どものわがままが通用しない、大人たちの社会。その社会に、あるときはいやがり反発しながら、またあるときはすすんで受け入れながら、彼らは大人になっていく。大人になるということは、その身体的な成長よりも、精神的な、社会的な成長の方が重要なのである。子どもたちが自分たちの未熟さを自覚し、大人たちの社会の論理との折り合いを付けながら、精神的に成長していく様子が、それらの作品では肯定的に描かれる。

②小津安二郎の映画『生まれてはみたけれど』も、子どもたちの視点から、大人への憧れを描きつつ、子どもたち自身が大人に一步近付く様子を描いた作品だということが出来るだろう。2人の兄弟は父に尊敬の念を抱き、自分たちの父親がとても偉い人間だと思っている。しかし実際には、2人の子分である太郎の父親の部下であることを知り、頭を下げ、機嫌をとる父の姿に幻滅する。だが、最終的に、彼ら2人は父を許すことになる。恐らく、彼らは大人の社会の仕組みの一端を理解したのである。そうして彼ら2人は一步大人に近付いた、ということになるだろう。子どもの成長によって、親子は和解し、ハッピーエンドを迎える。だが果たしてそれは本当に「子どもたちのため」の成長だと言えるのだろうか。

③本作では大人と子どもは非常に対照的に描かれている。大人たちは基本的に個別的な存在として描かれることが多い。会社のなかをトラッキングで映したショットでは、そこで働く大人たちはそれぞれがばらばらな姿勢をとり、ばらばらにあくびをしたり、仕事をしたりしている。皆が座っているわけではなく、なかには立っているものもある。また、兄弟の父親が専務の家を始めて尋ねた時、大人たちは各々会釈をしている。彼らは一斉に会釈するのではなく、一人一人が自分のタイミングでお辞儀する。彼らは一人一人がばらばらに動いているのである。加えて、大人たちは大人1人で行動することも多い。父親が線路沿いを歩いている時、基本的に彼は他の大人と一緒に歩いているわけではない。例外的に先生と話しているところがあげられるだろうが、それ以外では彼は誰か大人と一緒に歩いているわけではない。もし専務に会えば、彼は会釈をして車に乗せてもらう。交番の警官も、屋台の男も1人で立ち、あるいは座っている。亀吉の父親も怒鳴りにやってくるときは1人だし、養鶏場で働く父親も1人で作業を行っている。彼らは子どもたちに囲まれることはあっても、大人たちに囲まれることはない。こうした点で、基本的に本作のなかで大人たちはそれぞれ個別的に描かれていると言えるだろう。

④対して子どもたちは、集団として描かれることが多い。子どもたちはグループで行動する。映画の前半部では、亀吉をリーダーとした子どもたちのグループが連れ立って行動する様子が何度も描かれている。専務の家の息子呼びにくる時、彼らは大人数でやってくる。また、2人の兄弟が学校へ行く朝、家まで迎えにくる子どもたちは複数人でやって来ている。兄弟が帰宅したあと、「弱虫」と彼らを非難してくるときも何人も一緒にやってくる。兄弟も例に違わず、酒屋に頼んで亀吉をこらしめ、彼らが親分となった後は、彼らも子分たちを引き連れて行動するようになる。また、学校での子どもたちの動きも、大人たちの動きと比べて一律的である。彼らは外で整列、行進を行っている時、きっちりと動きがそろっている。また、習字を行っているときでも、子どもたちは皆、一様に同じように座っているし、同じような坊主頭をしている。さらに、兄弟がはじめて登校したとき、亀吉は兄弟をいじめようとするが、先生に見つかり止められる。この様子を見る他の子どもたちは全く同じタイミングで同じ動きを行うのである。このように子どもたちは集団的であると言えるだろう。

⑤子どもたちの大人への憧れは、仕草の模倣に最も良く現れている。特にそれを象徴的に示しているのが煙草だ。子どもたちの煙草への憧れは、実際に煙草を吸う大人たちとの対照によって強調される。兄弟の父親が煙草を吸うシーンは何度も登場している。彼は出勤途中で踏切に捕まった時、必ず煙草を吸っている。父親の職場では大人たちがそれぞれに煙草をくゆらせながら仕事をしている。子どもたちは、それに憧れるかのように、煙草を吸う、あるいは吸う真似をする。兄弟が学校に行かず道ばたで習字を書いているときに、道を通りがかった男が捨てた煙草を弟は拾いそれを吸う。続いて兄も吸う。兄は咳き込みすぐに捨ててしまうが、ここでは彼らが煙草への憧れ、すなわち大人への憧れを抱いていると言ってよいだろう。同様に、兄弟が学校へ行ったとき、亀吉や兄は鉛筆を口にくわえてジェスチャーする。これは明らかに煙草を吸う仕草の模倣であろう。

⑥子どもたちの社会と大人たちの社会との最も大きな違いは、その上下関係の作られ方にある。子どもたちの上下関係は基本的に身体的な力関係で成立している。喧嘩が強いのか、弱いのかによって、上に立つものとそうでないものが分けられる。兄弟が引っ越して来た時、明らかに亀吉は自身の力の誇示によって子どもたちを従えている。子どもたちが自分たちより強いものとして亀吉を捉えているのは、兄弟に振り返りにあった子どもが、報復を求めて亀吉のもとへと向かうところから伺うことが出来るだろう。彼らは自分たちでは敵わなかった相手を、より強い亀吉に懲らしめてもらおうと思っているのである。基本的には力が強いものが上に立つ。これが子どもの社会の上下関係である。他方、大人の社会の上下関係は単純な力の強さによってではなく、より複雑な力関係によって構成されているといえるだろう。そこには特に金銭的な力が大きく寄与している。専務にべこべこ頭を下げている父親に反発した子どもたちは、父を非難する。それに対して、父はこう答える。「太郎ちゃんとはお金持ちだからだよ」。あるいは、弟が酒屋に亀吉をこらしめるように頼む。それが成された後、弟は太郎もついでにこらしめてくれというが、酒屋は太郎の家はお得意様だからと言ってこの頼みを断ってしまう。単に暴力を有していれば、大人の社会では必ずしも上に立つことが出来るというわけでないことを、本作は描いている。

⑦そしてその大人の社会の構造に疑問をもった兄弟は父親に反発する。自分たちの社会との相違が、お金にあることを知って、そこに疑問を呈する。「お金があるから偉いの?」、と。これに対し父は「お金がなくても偉いものもある」というが、更に「お父ちゃんはどっちなの?」と聞かれてしまい答えに窮してしまう。子どもたちの大人への憧れは、疑問に変わるのだ。しかし、その後、この問いに納得のいく答えは子どもたちに与えられないまま、映画は終わる。父は子どもたちの気持ちはよく分かる言いながらも、先の問いに答えは出せない。だが子どもたちはそんな父親の気持ちを汲んで、父を受け入れる。出勤する父が専務にであった時、会釈をするか父は迷うが、兄弟はお辞儀するように勧めるのだ。彼らは大人の社会の理不尽さを感じながらも、それを受け入れ、一歩大人に近付いたのである。

⑧だがこの終わりは本当に良い終わりと言えるのだろうか。本作品では、この父子の和解がハッピーエンドのように描かれている。だが、大人の社会の理不尽さへの問いは宙づりのままである。子どもたちが少し成長したのだと考えればハッピーエンドのように感じられるが、果たしてそれは妥当なのだろうか。子どもたちを大人の社会に適応させることが良いことであるかのように描かれているが、それは大人の都合なのではないだろうか。この作品は「大人のための繪本」と銘打たれている。すなわち、大人のための、子どもを大人の社会の論理に適応させることの正当性を裏打ちするような作品となっているようにも見えるのである。単純に子どもの社会の上下関係が良いものであるとは言えないだろう。しかし大人の社会に対する子どもたちの疑問が圧殺されてしまっていることは、決して見逃してはならないだろう。